The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	借用語における形態素脱落の通時的変化 ： 英語からの借用語における屈折接辞 -ed の場合
Author(s)	眞野, 美穂
Citation	現代日本語研究. 2024, 15, p. 61-74
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/98463
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

借用語における形態素脱落の通時的変化

―英語からの借用語における屈折接辞 *-ed* の場合―

Diachronic Change of the Morphological Reduction in Loanwords: The Case of the Inflectional Affix *-ed* in English Borrowings

眞野　美穂

MANO Miho

キーワード　借用語，形態素脱落，英語，屈折接辞，通時的変化

要　旨

本稿では，借用語の中でも大きな割合を占める，英語からの借用語における屈折接辞　*-ed* に着目し，借用語内での脱落の有無と使用がどのような関係にあり，通時的にどのような変化が生じているかを明らかにした。Irwin (2011) は，近年原語の形態素が保持される傾向にあることを指摘しているが，予備調査として行った BCCWJ の調査では十分なデータが得られず，課題も明らかとなったため，本調査として新聞と週刊誌を対象に，調査を行った。その結果，1990 年代から 2010 年代の 10 年ごとの使用頻度を比較すると，2010 年代で有意に形態素脱落のない，つまり原語の形態素を保持した形式の使用頻度が高くなっており，通時的な変化が見られることが明らかになった。

１．はじめに

他の言語から語を借用する際，原語からの音韻的な変化に加え，音や形態素の脱落が起こることがあることはよく知られている（小寺 1985，石綿 2001，田守 2004，Irwin 2011，他)。

本稿が着目するのは，借用語の中でも大きな割合を占める，英語からの借用語における屈折接辞　*-ed* の振る舞いである。過去を表す　*-ed* という屈折接辞を含む語が借用される際には，(1a)のように借用語に当該形態素を表す部分が

存在しない形態素脱落(morphological reduction)が起こる場合もあれば，(1b)のように，母音挿入を経て，そのまま保持される場合もある。さらに，保持された場合においても，(1c)のように原語と異なる子音になる場合（ここでは[t]→［d(o)]）もあることが，これまでの研究で指摘されている（眞野・樋口 2013，眞野 2022)。

(1) a. scrambled egg [skræˈmbəld eˈg] → スクランブル__ エッグ
b. fried chicken [fráid tʃɪkɪn] → フライド チキン
c. baked potato [beɪˈkt pəteɪˈtoʊ] → ベークド ポテト

眞野 (2022)は，英語からの借用語内で実際どのような語で形態素の脱落が起こっているのか，また脱落しない場合はどのような形（音）で借用されることとなるのかについて，外来語辞典を対象に調査し，それに影響する複数の要因について検討している。しかし，それぞれのパターンが実際，どのくらい使用されているのか，そして通時的な変化があるのかについては，未だ明らかにはなっていない。本稿では，コーパス調査を通し，それらの点を明らかにすることを目的とする。

２．借用語における形態素の振る舞い

２．１．借用過程で生じる音韻変化と形態素脱落

まず本節では，本稿の調査対象である原語に *-ed* を含む借用語について，借用の際に生じる様々なパターンについて概観する。

日本語が他言語から語句を借用する際に生じる変化は，原語との音韻体系の差異から生じる音韻的変化だけではなく，形態統語的変化や意味的変化も存在し，その変化は多岐にわたることが，これまでの研究の中で指摘されてきた（石綿 2001，Kubozono 2002，田守 2004，Irwin 2011，他)。これら借用の際に生じる変化には，子音・母音の変化や，アクセント付与，母音挿入のような日本語の音韻体系に合わせるためにほぼ義務的に起こるものもあれば，義務的ではない変化もある。本稿が対象とする原語に *-ed* を含む借用語については，その保持の有無，および発音の変化は，義務的に決まるものではない。

英語の屈折接辞 *-ed* は，生じる音韻環境によって，(2)のような３つの異なる発現形を持つ。

(2) 英語における *-ed* の発音

a. [t]: [t]を除く無声音の後

b. [d]: [d]を除く有声音の後

c. [ɪd]: [t], [d]の後

そして，それらを含む語が日本語に借用される場合，(3-5)にあげるような様々なパターンが存在することが指摘されている。

(3) a. [t] → Ø: condensed milk コンデンス ミルク

b. [t] → [to]: pressed powder プレスト パウダー

c. [t] → [do]: baked potato ベークド ポテト

(4) a. [d] → Ø: gummed tape ガム テープ

b. [d] → [do]: boiled egg ボイルド エッグ

(5) a. [ɪd] → Ø: blended whisky ブレンド ウイスキー

b. [ɪd] → [eddo]: hot blooded ホット ブラッデッド

c. [ɪd] → [iddo]: value added tax バリュー アディッド タックス

(眞野 2022:228 より一部抜粋)

(3-5)の a 例は，それぞれ形態素脱落が起こったパターン，そして b，c は形態素が保持されたものである。しかし，後者の場合も，(3b)，(4b)，(5b，c)のように，単純に母音挿入を行う場合だけでなく，子音自体が変化する場合(3c)も観察される。これら複数のパターンが存在することからも，借用において，義務的にある特定の変化が起こっている訳でないことが分かる。これらの背後には，借用過程の多様性が要因として存在すると考えられる。

２．２．借用過程と借用形態

Irwin (2011)は，借用には大きく分けて，聴覚を通しての借用（auditory loan：以下「音声的借用」）と文字を通しての借用（orthographic loan: 以下「文字的借用」）があることを主張した。そして，その結果生じる借用には，音声的借用，(発音記号が付与された）辞典借用（dictionary loan)，綴り字借用(spelling loan)の 3 種類があることを指摘する(Irwin 2011)。先にあげた(3c)に見られるような子音の変化には,綴り字の影響が考えられる(cf. 眞野 2022)。

しかし，借用語については，その借用過程は多くの場合明らかではない。さ

らに，すでに借用語として存在する語を組み合わせ，複合語を合成することも可能であるため，複合語を借用したのか，日本語の中で複合語を作り出したのかを検証することも困難な場合がある。そのため，本稿では，その区別は問題としないこととする。

借用語に見られる形態素の振る舞いについて，眞野（2022)は，英語の 4 種類の異形態を持つ形態素（*-ing*, *-ed*, *-s* (PL)，-’*s* (POSS)）を対象に音韻的な要因を，統語的な役割を持つ項構造に関わる形態素（*-ing*, *-ed*, -’*s* (POSS)），同音異義である形態素（*-s* (PL)，-’*s* (POSS)）では意味機能による差異の有無を考察した。外来語辞典[1)]から抜き出した語を使って調査し，その通時的変化，異形態別の脱落率と保持された場合の形態，それにかかわる音韻的，形態統語的特徴を含む要因を検討し，借用語における形態素の振る舞いには，音韻的制約，語構造，意味の弁別，綴り字の影響など様々な要因が，複雑に影響を与えていることを主張し，1 つの要因で現象すべてを説明することは不可能であることを指摘している。しかし，その調査は外来語辞典の収録語を対象にしていることから,実際どのような形がどのくらいの頻度で使用されているのか，という点は明らかではない。

Irwin (2011)は形態素脱落の通時的変化について，以下のように述べる。

> “There appears to be a strong tendency for more recent borrowings to retain donor morphology, perhaps connected with an increased general awareness of English grammar among Japanese speakers…. Further research is required in this area.” (Irwin 2011: 142)

しかし，本当に近年形態素が保持される傾向にあることかどうか，その通時的変化についての裏付けは，外来語辞典を対象とした眞野(2022)を除き，未だ行われていない。

そこで本稿では，原語に *-ed* を含む借用語について，形態素脱落の有無に関して、実際の使用傾向と通時的な変化の有無を明らかにすることを目的とし，調査を行う。

３．予備調査

３．１．調査方法

まず，実際の使用状況を探るために，「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（BCCWJ）を使用し，予備調査を行う。眞野(2022)の外来語事典調査において，複数の借用形態が得られた英語からの借用語を対象とし，表１にまとめたそれぞれの借用形態を調査する。

表１：調査対象語

原語（英語）	借用形態	
	形態素脱落あり	形態素脱落なし
assorted	アソート	アソーテッド，アソーティッド
baked	ベーク，ベイク	ベークト，ベークド，ベイクト，ベイクド
blended	ブレンド	ブレンデッド，ブレンディッド
buttered	バター	バタード
closed	クローズ	クローズド
colored	カラー	カラード
combined	コンバイン	コンバインド
concealed	コンシール	コンシールド
cooked	クック	クックド，クックト
dropped	ドロップ	ドロップト，ドロップド
faced	フェイス	フェイスト，フェイスド
fashioned	ファッション	ファッションド
fried	フライ	フライド
handed	ハンド	ハンディッド
illustrated	イラストレート	イラストレーティッド
leveraged	レバレッジ	レバレッジド
mixed	ミックス	ミックスト，ミックスド
notched	ノッチ	ノッチト
powered	パワー	パワード
rolled	ロール	ロールド
scalloped	スカラップ	スカラップド，スカラップト
shaped	シェープ	シェープド
smoked	スモーク	スモークド，スモークト
sponsored	スポンサー	スポンサード
tailored	テーラー	テーラード
tucked	タック	タックト，タックド
winged	ウィング	ウイングド

また，語構成上どのような要素として生じるかにより，形態素脱落の有無に影響がある可能性(cf.　眞野　2022[2])を考慮し，今回はこれらの語が複合語の前部要素として生じる場合に限定し，原語（英語）において対応する複合語が存在する場合のみを対象とする。

コーパス検索アプリケーション「中納言」を使用し，キーを語彙素指定の各対象語とし，加えて(6)のような指定を行い，短単位検索を行った。それぞれの結果として得られるのは，(7)のような例である。

(6) a. 後方共起（1 語）を名詞（外来語）に指定。

b. 後方共起（1 語）を文字列「・」「　（空白)」とし，後方共起（2 語）を名詞（外来語）に指定。

(7) a. クローズドクエスチョン

b. クローズド・ノート

このようにして得られたデータから，固有名詞(8)や，複合語ではなく単独での使用と考えられる例(9)など，を除いた。固有名詞を除いた理由は，非常に頻度が多いものが含まれることから，データの偏りを防ぐためである。

(8) a. パワー・ポイント

b. ケンタッキー・フライド・チキン

(9) a. カラー ＮＯ．７

b. 『クローズアップ現代』

その上で，対応する複合語が原語に存在するもののみを選び出し，形態素脱落の有無を判断した[3]。つまり，(10)のように対応する原語に当該形態素が含まれないものや,(10b)のように対応する複合語が原語に存在しない例を除いた。

(10) a. カラーテレビ←color television/ *colored television

b. フライマン（フライフィッシングをする人）

また，(11)のように 3 つ以上の構成素からなるものは，原語で許される限り，対象とした。

(11) ベークチーズケーキ←baked cheese cake

３．２．調査結果と課題

調査の結果，(12)のような例が得られた。そして，それらを形態素脱落の有

無で分類した。

(12) a. カラー グラス←colored glass(es)　【形態素脱落あり】

b. カラード・ドア・ミラー←colored door mirror【形態素脱落なし】

まず，ジャンル毎に形態素脱落の有無の割合を，形態素脱落なしの割合が高い順にまとめたものを，図１に示す。

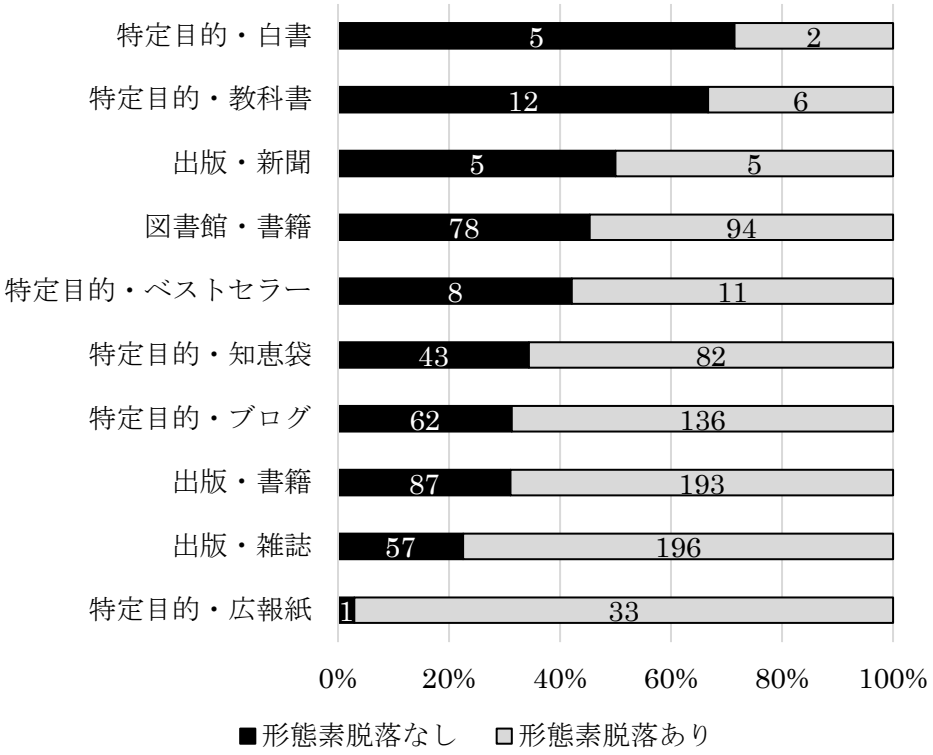

図１：ジャンル別　形態素脱落の有無とその頻度（BCCWJ）

ジャンルによる形態素脱落の差異の存在が示唆されるものの，各ジャンル毎の頻度総数の差異も目立つ。

次に，図２に刊行年ごとに，形態素脱落の有無の頻度と割合をまとめる。

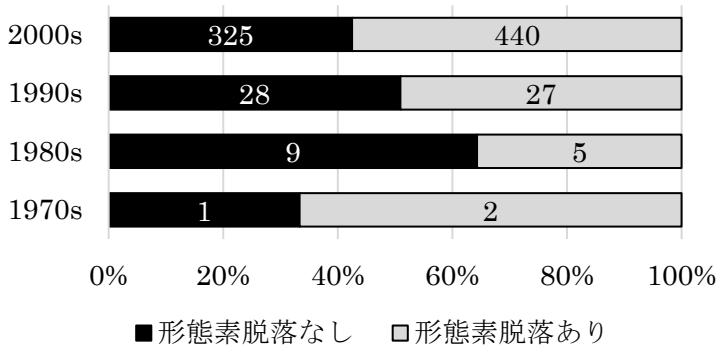

図２：刊行年別　形態素脱落の有無と割合（BCCWJ）

刊行年ごとの差異については，もともと BCCJWJ ではサブコーパス間で収集期間に差があり[4)]，それが影響を与えている可能性が否定できない。しかし，その割合の変化を見ても，近年形態素脱落が増えているという傾向は観察されなかった。

これら予備調査の結果からは，限られた借用語を対象とする場合，BCCWJ では通時的な変化についての検証は難しいことが示唆された。またジャンルによる差の存在も観察されたため，ジャンルを限定し，年度毎のデータ数の差異が少なく，より多くの用例を対象に調査できる新聞と週刊誌を対象に，本調査を行うことにした。

４．通時的調査

４．１．調査方法

３節で明らかになった問題点から，本調査として，新聞と週刊誌に対象を絞り，通時的変化を見ることとした。調査対象とするのは,『毎日新聞』と『週刊エコノミスト』である。毎日新聞を対象に選んだ理由としては，日本国内の全国紙の中でも最も発行年の長い新聞であり，発行部数の面でも 2023 年には第 3 位であることがあげられる。それに加え，検索サービス「毎索」により日付別に『毎日新聞』と『週刊エコノミスト』の全記事を検索でき，通時的な変化を把握しやすいという利点がある。新聞と週刊誌というジャンルに絞ったのは，ジャンルによる影響を避け，要因を限定するためである。

調査期間は,「毎索」ですべて本文検索が可能な 1990 年代以降とした。具体的には，1990 年 1 月 1 日から 2019 年 12 月 31 日までの毎日新聞（本誌・地方版）の朝夕刊，スポーツ新聞，号外やデジタル版,『週刊エコノミスト』を含め，すべてを対象とした（以下，まとめて「毎日新聞調査」と呼ぶ)。

調査方法は，次のとおりである。「中納言」とは異なり，毎日新聞社の記事データベース（毎索）ではキーワード検索のみしかできないことから，BCCWJ の調査とは異なる手順を取る点に注意されたい。まず,「毎索」の簡易検索モードを利用し，記事見出しあるいは本文に対象語（表 1 参照）の内，形態素脱落のない借用形態が含まれるものを抽出する。検索結果の中から，目視で複合語を抽出する。その際，予備調査と同様に，固有名詞や引用，そして複合語ではなく単独での使用と考えられる例を除いた上で，対応する複合語が原語に存在するもののみを選び出した。その後，得られたそれらの複合語に対し，形態素が脱落した複合語を検索語とし抽出し，頻度を数えた。手順を以下に簡潔にまとめる。

1) 形態素脱落のない借用形態を含む語を検索する。(検索語例：マッシュド)
2) 複合語前部に生じているものに限定し，原語（英語）に存在する複合語のみを抽出する。(例：マッシュドポテト←mashed potato(es))
3) 形態素脱落ありの対応形態を検索し，頻度を数える。(検索語例：マッシュポテト／マッシュ・ポテト)

その後，得られたデータを 10 年ごとにまとめ，形態素が脱落している語と保持されている語の頻度を比較する。

４．２．調査結果と分析

調査の結果得られた「形態素脱落なし／あり」の借用語の使用頻度と割合について，年代別に図３に示す[5)]。

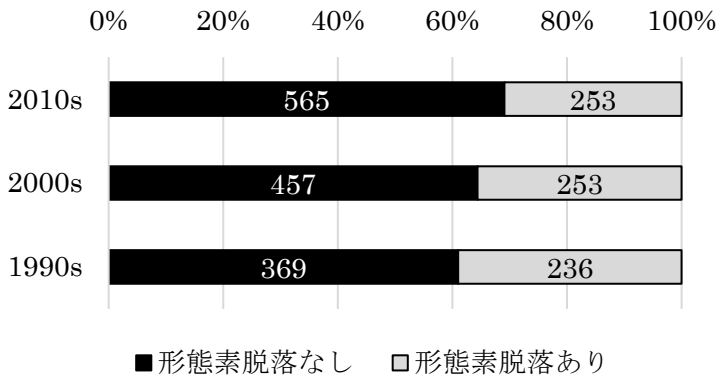

図３：刊行年別　形態素脱落の有無と割合（毎日新聞調査）

図３から，年代ごとに使用頻度は異なることが分かる。通時的な変化を見るため，年代と形態素脱落の有無という二要因により，カイ二乗検定を行ったところ，有意差が観察された（$\chi^2 = 10.343$，df = 2，$p < 0.01$）。そのため，残差分析を行った。その結果，1990 年代で「形態素脱落なし」の語の使用が有意に少なく（$p < 0.01$），2010 年代で「形態素脱落なし」の語の使用が有意に多い結果であった（$p < 0.01$）。2000 年代はその中間であるため，通時的に「形態素脱落なし」の語の使用が増える，つまり形態素が保持された形式が使用される傾向が高まっていることが分かる。

この結果は，Irwin（2011）の指摘を裏付けるものであった。眞野（2022）の外来語辞典の見出し語調査においても，形態素を保持する傾向が 1979 年版に比べ 2010 年版で有意に高いことが指摘されているが，今回の毎日新聞調査を通し，使用頻度という面においても，形態素が保持された借用語の使用頻度が通時的に増えていることが明らかになった。

次に，対象語ごとの詳細な結果を，次頁の表２にまとめる[6)]。年代ごとにそれぞれの借用形態の頻度をまとめたものである。

表２：借用形態別調査結果（毎日新聞調査）

原語	形態素脱落	借用形態	1990s	2000s	2010s	例
assorted	なし	アソーテッド	0	1	0	アソーテッドパック
	あり	アソート	0	1	1	アソートパック
baked	なし	ベークド、ベイクド	10	32	40	ベークドアウト
	あり	ベイク、ベーク	1	0	0	ベークアウト
blended	なし	ブレンディッド、ブレンデッド	4	6	13	ブレンデッドウイスキー
	あり	ブレンド	4	5	5	ブレンドウイスキー
buttered	なし	バタード	7	0	0	バタードウーマン
	あり	バター	0	0	0	
closed	なし	クローズド	36	58	26	クローズド・クエスチョン
	あり	クローズ	11	2	1	クローズ・クエスチョン
colored	なし	カラード	14	2	1	
	あり	カラー	5	7	5	
combined	なし	コンバインド	23	22	73	
	あり	コンバイン	0	0	0	
concealed	なし	コンシールド	1	0	0	コンシールド・ガン
	あり	コンシール	0	0	0	
cooked	なし	クックド、クックト	3	0	0	クックドライス
	あり	クック	0	0	0	
fried	なし	フライド	193	227	283	フライド・ポテト
	あり	フライ	2	1	3	フライ・ポテト
leveraged	なし	レバレッジド	4	18	4	レバレッジド・バイアウト
	あり	レバレッジ	0	0	0	
mixed	なし	ミックスト、ミクスト、ミックスド、ミクスド	23	40	70	ミックスト・メディア
	あり	ミックス、ミクス	74	25	26	ミックス・メディア
powered	なし	パワード	3	10	24	パワードスーツ
	あり	パワー	0	1	2	パワースーツ
rolled	なし	ロールド	0	2	0	ロールドポーク
	あり	ロール	0	1	3	ロールポーク
shaped	なし	シェープド	1	0	0	シェープドジャケット
	あり	シェープ	0	0	0	
smoked	なし	スモークト、スモークド	10	0	0	スモークドサーモン
	あり	スモーク	74	167	157	スモークサーモン
sponsored	なし	スポンサード	9	3	3	スポンサードマラソン
	あり	スポンサー	0	1	0	スポンサーマラソン
tailored	なし	テーラード、テイラード	26	34	24	テーラードカラー
	あり	テーラー、テイラー	3	0	0	テーラーカラー

表２からは，借用語ごとにかなりの頻度差があることが分かる。また，調査手法の特徴により（「形態素脱落なし」の語を起点として調査を行っている），「形態素脱落あり」の語の頻度は全般的に低いという問題がある。一方で，形態素脱落を起こしている「スモーク」を含む語に関しては，頻度が突出して高い。これらの点が，全体的な傾向に影響を与えている可能性があることには注意が必要である。

５．結論と今後の課題

本稿では，毎日新聞調査を通し，原語に *-ed* を含む借用語において，形態素が保持された借用語の使用頻度が通時的に増えていることを明らかにした。これは Irwin（2011）の指摘を裏付ける結果であった。

しかし，本調査にはいくつか課題が残されている。１つの屈折接辞についての調査である点，研究手法の面から形態素脱落ありについてはその一部しか対象にできなかった点，用例数の偏り，ジャンルが限定的である点，などである。今後，これらの課題に対し研究を進め，借用語における形態素の振る舞いについてより詳細に検討し，借用の際に原語をどのくらい分析的に捉えているのか，という点を含め，明らかにする必要がある。

注

１）眞野（2022）が主な調査対象とした外来語辞典は，三省堂編修所（編）（1979）『コンサイス外来語辞典』第三版（収録項目数　23,500）と，三省堂編修所（編）（2010）『コンサイス カタカナ語辞典』第四版（収録項目数　48,100）である（いずれも三省堂発行）。その間には約 30 年の開きがあり，項目数は倍増している。

２）眞野（2022）の調査によると，*-ed* を含む語については，派生語で有意に脱落が少なく（$p < 0.01$），複合語後部要素として生じた場合は有意に多いこと（$p < 0.01$）が報告されている。

３）ただし，原語において，(i)のように当該形態素を含む場合と含まない複合語の両方が同様の対象物に対して許されると判断される場合は含めた。

（i）　カラーペン←color pen/ colored pen

４）BCCWJ は３つのサブコーパスから構成されているが，それぞれ収録している資料の刊行年の期間が異なる。「出版サブコーパス」は 2001～2005 年に刊行された資料（書籍，雑誌，新聞）を約 3500 万語収録，図書館サブコーパスは 1986～2005 年に刊行された書籍を約 3000 万語，特定目的サブコーパスは最長 1976～2005 年に刊行された書籍，広報誌，Web 上の書き言葉など約 3500 万語を収録している（参考：https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/basic-design. html#05)。

５）毎日新聞調査における 1990 年代の「形態素脱落なし」の割合は 60.1%であり，先の BCCWJ の調査結果（50.9%）より高いが，これは調査方法の違いにより生じたものであると考えられる（毎日新聞調査では，形態素脱落なしの複合語が観察された場合に限り，それが対応する形態素脱落ありの例のみを検索対象としているため)。そのため，その差異については，今回検討しない。

６）ただし，以下の原語の借用形態（表１「形態素脱落なし」を参照）については，それぞれ該当例がなかったため，表２には含まれていない。

(ii) dropped, faced, fashioned, handed, illustrated, notched, scalloped, tucked, winged

参考文献

石綿敏雄(2001)『外来語の総合的研究』東京堂出版.

小寺茂明(1985)「英語から入った外来語における音脱落現象」『音声学会会報』178: 3-6.

田守育哲(2004)「英語から派生した外来語にみられる音韻的・形態的・統語的・意味的変化」『人文論集』39: 219-234. 神戸商科大学.

眞野美穂・樋口薫乃(2013)「借用語における形態素脱落の実態：*-ed/ -ing* の場合」『日本言語学会第 146 回大会予稿集』96-101. 日本言語学会.

眞野美穂(2022)「英語からの借用語における形態素の振る舞い－外来語辞典調査からの一考察－」『鳴門教育大学研究紀要』37: 220-242. 鳴門教育大学.

Irwin, Mark (2011) *Loanwords in Japanese*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Kubozono, Haruo (2002) “Prosodic Structure of Loanwords in Japanese:

Syllable Structure, Accent and Morphology.” *Journal of the Phonetic Society of Japan*, 6(1)：79-97.

（人文学研究科准教授）